令和七年四月号
《第一四八号》
しろへび
宗教法人岩國白蛇神社

〒740-0017
今津町六丁目４－２
☎ 30－3333

卯月（うづき）の祭典・行事案内

【月次祭】 九時半
六日（日）
三十日（水）己巳（つちのとみ）の日

【昭和祭】 九時半
二十九日（火）

「激動の日々を経て復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いを致す」祝日です。
皆さんと共に昭和天皇をお偲びしたいと思ひます。

【昭和天皇御製】〈第一二四代〉

風さゆるみ冬は過ぎてまちにまち
し八重桜咲く春となりけり
（昭和二十七年）
「日本が独立を回復した年」

【月次祭】 三月一日 九時半

土曜日で朔日参りの日であり、己巳（つちのとみ）の日でもあり、約四十名の今までにない参列者がありました。勿論、今年が巳年であることも大いに関係があつたと思ひます。本当にうれしい悲鳴とはこの様な事をいふのであらうと切に思つた次第です。

宮司は挨拶で「新３ｋ」について話しました。「きつい、きけん、きたない」と若者から嫌われてゐた建築関係の会社がこの度**「給料が良い、休暇がとれる、希望がもてる」**とアピールしてゐることを紹介し、このことは建築関係のみならず、日本国にも言へるのではないかと。

閉塞感の漂ふ今こそ、「楽しい日本」ではなく、「希望のもてる日本」にして貰いたいと切望する次第であります。

【推薦図書】

『零戦 最後の証言』

NF光文社文庫
神立尚紀著 一五四〇＋税

『・・・人がほんとうに死ぬのは、その存在が誰からも忘れられたときだ、と思う。来年（令和七年）は戦後八十年。帝国海軍が存在した期間（七十三年）よりもはるかに長い時間が過ぎた。「八十年」といえば、人が何かを忘れ去るには十分すぎる時間だ。しかし、私は、縁あって出会った戦士たちの記憶を、誰かの心のなかに刻むことができれば、という思いでこの本を書いた。八十年前、欲も得もなく、ただ大切なものを守るためと信じ、大空で生命を賭して戦った若者たちが確かに存在した。このことを、次代を担う世代にこそ知ってほしい。

―彼らの記憶を未来にまで繋いでいくために。令和六年四月』〈まえがきより〉

四月十一日（金）十時より
岩国護国神社春季例祭が行れます。岩国市民の守り神でもあります。戦後八十年の節目の年です。皆さまこぞって参列し、郷土の英霊に感謝の誠を捧げませう。

護国神社境内に建つ「神馬」

〔神社も春本番とともに〕

岩國白蛇神社にもやうやく春が訪れました。向かひの今津天満宮境内には紅白の枝垂れ梅が咲き、当神社の西側にはひめあやめが一斉に咲き乱れ、まさにいきなり春がやつて来たやうでした。勿論、白蛇の屋外放飼場の石垣の隙間からは白蛇が可愛い顔を覗かせてゐます。

正月以来各地から多くの参詣者にお参り頂き、今も日々多くの方々がお参り下さり、感謝の至りで、職員一同御祭神に感謝の誠を捧げ、境内の清浄化に励みたく思つている次第であります。

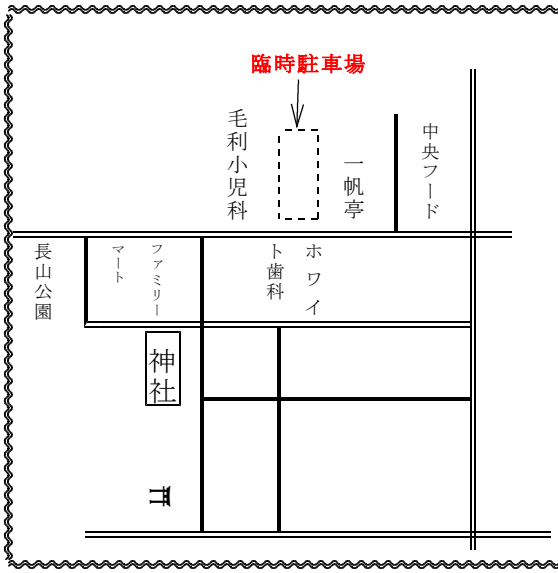
正月三が日をはじめ、一月中の予想以上の初詣により、授与所でのお札やお守りが授与できず大変なご迷惑をおかけしました。遅ればせながらお詫び申し上げます。尚、現在は全てのお守りが揃つてゐませんが、四月に入れば今まで通りの授与ができるものと思ひます。

四月二十六日からは徒歩五分の所に臨時の駐車場も借りることができました。心より感謝をこの紙を借りてお礼を申し上げる次第です。

《お知らせ》

四月二十六日(土)から五月六日(火)まで臨時の駐車場が設置されます。

場所は、毛利小児科と一帆亭の間にある空き地で、神社まで徒歩五分の位置です。約五十台は停められ、警備会社のガードマン三名が交通整理にあたります。今からSNS等で多くの方に情報提供して頂きたくお願ひ致します。



五月三日～六日のゴールデンウイーク四日間、白蛇観覧所下の二か所の駐車場周辺の交通整理要員を募集します。保存会の理事及び評議員さん方、そして神社の総代さん方が対象です。勿論ご紹介でも構ひません。追つてお知らせします。宜しくお願ひ致します。

新連載

本居宣長の『直毘霊』を読む（一）

直毘の霊

【この篇は、道といふことの論ひなり】

皇大御国は、掛けまくも可畏き神御祖天照大御神の、御生れませる大御国にして、万の国に勝れたる所由は、先づここに著し。国といふ国に、此の大御神の大御恵み被らぬ国なし。

大御神、大御手に天つ璽を捧げ持たして、御代御代に御璽と伝はり来つる三種の神宝は、是ぞ。

【現代語訳】

直毘霊〔この篇は、「道」といふことについての論である〕

皇大御国といふこの国は口に出していふのも恐れ多い神の祖先にあたる天照大御神がお生まれになつた御国で、この国が他の多くの国と違つて優れてゐるのは、何よりも先に、この点で顕著であることである。万国至る所の国々に天照大御神の御恩をいただかぬ国はないのである。

天照大御神が、その御手に天の御璽の品を捧げ持たれて、各天皇の御代御代に即位の御璽を伝へてきた三種の神宝は、これである。

「古事記」を読まずして日本は語れません。その「古事記」は本居宣長著の「古事記伝」によつて、我々は今も読むことができるやうになりました。この「古事記伝」一之巻の巻末に宣長は「直毘霊」を著しました。（続く）